

発掘調査の概要

日高山瓦窯の調査(飛鳥藤原第207-3次)

日高山瓦窯は、藤原宮南面中門(朱雀門)の南約300mに位置する日高山丘陵の北側に作られており、藤原宮の瓦を焼成した瓦窯として知られています。藤原京の条坊でいうと、朱雀大路に面した右京七条一坊に相当し、藤原宮に極めて近接する場所で瓦が作られていたことがわかります。

現在は日高山児童公園として整備されていますが、1960年におこなわれた公園改修工事の際に瓦窯1基が発見され、奈良県教育委員会によって調査されました。その後、1977年に奈良文化財研究所が磁気探査をおこなったところ、さらに瓦窯が複数存在することが判明しました。そこで翌年に発掘調査を実施し、2基の瓦窯を検出しました。そのうち1基は^{あながま}窖窯でしたが、もう1基はこの時期にしては珍しい平窯で、1960年に調査された窯と同じ構造でした。これらの発掘調査等の結果から、現在では少なくとも3基以上の瓦窯の存在が確認されています。

このたび、奈文研では改めて日高山瓦窯の学術調査に着手することとしました。その端緒として日高山瓦窯が存在する丘陵北側の斜面全面について、現況地形のレーザー測量を実施するとともに、地下構造の概要を調べる目的で物理探査をおこないました。実施期間は11月2・4日の2日間です。

今回実施した探査は、磁気探査と地中レーダー探査の2種類です。磁気探査は地表付近において地磁気を測定し、地下に存在する磁気異常を検出することによって、地下構造や埋蔵物等を把握する手法で



1977年の発掘調査の状況(北西から)

す。瓦窯の場合、瓦の焼成時に生じる高熱によって窯の内側の壁土が熱残留磁気を帯びるため、磁気異常として検出されます。

ただし、磁気探査だけでは瓦窯か金属片等の埋蔵物かの区別がつきません。そこで、地中レーダー探査で地下の状況を読み取り、瓦窯のような大きな構造体が存在するかどうかを探査することにしました。こうした2種類の手法を併用することによって、より精度の高い探査結果を得ることができます。

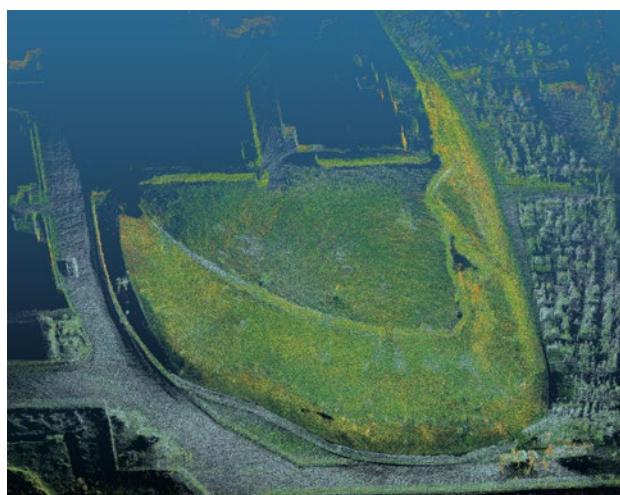
これらの探査の結果については、現在もデータの解析をおこなっているところです。現時点では、かつて調査が実施された瓦窯の位置を再確認するとともに、新たな瓦窯の存在の可能性を示すデータが得られています。

今後、これらの成果をもとに調査計画を策定し、実際に発掘調査をおこなって瓦窯の存在の有無を確認する予定です。その結果については、また改めてご報告する予定ですので、ご期待下さい。

(都城発掘調査部 林 正憲)



物理探査のようす(地中レーダー探査)



レーザー測量の結果(丘陵を北から望む)